

デジタルハリウッド大学

2022 年度 一般選抜 A 方式

国語 [60 分]

【 注 意 事 項 】

1. 試験監督の指示があるまでは、問題冊子は開かないこと。
2. 試験監督から指示があったら、解答用紙に氏名・受験番号を正確に記入し、受験番号マーク欄にも受験番号を正確にマークすること。
3. 試験開始の合図後、この問題冊子を開き、32 ページ（白紙ページ含む）揃っているか確認すること。
4. 乱丁、落丁、印刷不鮮明などがある場合は、手を挙げて試験監督に知らせること。
5. 解答は、すべて別紙の解答用紙の解答欄にマークすること。
6. 試験開始から終了までの間は、試験教室から退出できません。
7. 不正行為を行った場合は、その時点で受験の中止と退室を指示され、同日受験したすべての科目の成績が原則無効となる。
8. 解答用紙は試験終了後、回収される。問題冊子は持ち帰っても良い。

第一問 次の小説の一節を読んで、後の設問に答えなさい。

二八歳の健斗^{けんと}は、会社を辞めて行政書士の資格を取るための勉強をしながら次の就職先を探している。同居する八七歳の祖父（母の父）は、要介護ではあるもののまだ健康体ではあるのだが、昼も夜も横になってばかりいて「早う死にたか」が口癖である。

「お母さん、今日は、風呂に入ったほうがよかね？」

「知らないよそんなの、入りたいんなら自分で健斗にお願いしろ。あと①お母さんって呼ぶな」

夕飯を食べ終え薬を飲むべきか等を訊き母に怒られていた祖父から頼まれ、健斗は入浴補助をするべくソファから立ち上がった。

脱衣所へ入ると引き戸を閉め、服を脱ぎはじめる祖父より早く自分のズボンの裾をたくしあげる。今までは、形式的に見守るだけで済んだ。しかし薬漬け病院から帰ってきて以降、浴槽への出入りを手伝わなければならなくなっている。

「入るか」

「お願いします、ありがとうございます、すみません」

健斗はまずイスに座らせた祖父の身体をシャワーで軽く流し、次いで浴槽に入れるための介助をする。アルミ製杖^{つえ}の代わりに、自分の鍛えた身体が生きた支えとなる。健斗は緊張する。やること自体は簡単だが、裸の老人と皮膚で触れ合っている感覚に不慣れで距離感がつかめず、②自分自身の精神も丸腰にされるようで異様に疲れるのだ。

「五分くらい入れればいいかな」

浴槽につかった祖父へ言い手を離そうとする健斗だったが、祖父は健斗の右手首をつかんだまま離そうとしない。

「おぼれる」

「おぼれないよ、こんな狭い浴槽で」

浮力で少し浮いてしまっている祖父の胸のあたりにまでしか湯ははられていない。三半規管が弱ってしまっているのか、身体が浮く感覚が怖いらしかった。しかしつい数日前、祖父があまりにもおぼれるとうるさいものだから健斗は自分が入浴する際水位を上限まで上げ検証済みだ。浮力にあらがい身体を沈めるほうが大変だった。

「ほら、おぼれるでしょう」

祖父は健斗を離そうとしない。沼から出現した化け物にしがみつかれているように感じた健斗は、突然尿意をもよおした。

「ちよつとおしっこしてくるから」

「おぼれるう」

「おぼれねえよっ」

強引に手をふりほどいた健斗はトイレへ行き、リビングで③小休止し祖父に対する母の小言を聞く。ついでに切つてあったメロンの残りも一切れ食べ、風呂場へ戻った。引き戸を開けると、ばちやばちやうるさい。半透明のドアを急いで開けると、祖父が右半身を湯に沈めたまま両手をあっちこっちにぶつけもがいていた。

おぼれている？

恐怖におそわれた健斗は暴れる化け物をつり上げるように急いで左腕をひっぱり、湯の中で体勢を立て直させる。

③おぼれた。本当におぼれた。三半規管を弱らせた祖父はなんでもない水位の浴槽で、体勢を立て直せないパニックに陥った。

怒られる、と健斗は感じた。子供の頃に長崎で隣家の金柑きんかんを勝手に食べ怒られた際の記憶と感情が一瞬で甦よみがえる。ようやく呼吸を落ち

着かせた祖父は、健斗の腕にしがみついたまま、浴槽の外に出ることを無言でうながした。動揺しながら健斗も無言で祖父の身体を洗う。弱音も文句もなにも言わない祖父の発する圧力に、潰されそうだった。

わざと沈めようとしたと、思われたのではないか。

たまたま起こった事故だと祖父には信じてもらえないかもしれないし、なにより健斗自身も自分のことが信じられない不安にとらわれていた。己の奥深くで、^(注)究極の尊厳死をかなえてやろうとする親切心とも異なる熱につきうごかされ、本当は危険だと感じていた入浴を、安全だと思いきもうとしたのでは。

風呂から脱衣所へあがり、おそるおそる身体を拭く健斗が正面へまわったとき、祖父が口を開いた。

「ありがとう。健斗が助けてくれた」

穏やかな口調で言われ、健斗は動きを止めた。

「死ぬとこだった」

④その一言に、一畳半ほどの脱衣所で平衡感覚を失い、おぼれそうになった。

違ったのか。

自分は、大きな思い違いをしていたのではないか。

悪くなるばかりの身体で苦勞しながら下着をはく祖父を見ながら健斗は、心を落ちつかせようとしていた。こうして孫をひっぱりまわすこの人は、生にしがみついている。

その後も祖父は、健斗を責める言葉を一切口にしなかった。

大型のリュックサックやドラムバッグ等に大荷物を詰めこんだ健斗が昼過ぎに多摩グラントハイツを出立しようとする、駅まで見送りに行くと祖父が言って聞かなかった。徒歩一〇分の距離に車をだすことなど普通はない。それに対し「母は玄關まででいい」と文句を言いつつも、結局は車をとりに行つた。スロープの近くで待機している健斗たち二人に晩夏の直射日光が降りそそぎ、うるさいくらいの蟬せみの鳴き声にしゃべる気も奪われる。

粉飾決算で業績が悪化して久しい医療機器メーカーの子会社に、健斗は営業職として中途採用された。資格勉強していた行政書士とはまったく異なる業種だが、三流大学出身者では決して就職できないような企業に就職できたのも、ここ数ヶ月の生産的 생활で培った様々な能力のおかげなのはあきらかだった。勤務地は茨城県の筑波研究学園都市で、住宅はそこから約一〇キロ離れたところにある阿見町という、霞ヶ浦近くの鉄骨造アパートだ。内定をもらい一ヶ月弱の間に引越すためすでに二度訪れており、来週の初出勤に向け、三二万円の中古車も現地カーディーラーで調達済みだった。

「寂しくなるねえ」

クーラー稼働中の車で坂道を下っている最中、後部座席に座る祖父が助手席の健斗へつぶやく。母と叔父は、祖父を長崎県の大村にある特別養護老人ホームへ入所させる予約をした。田舎の比較的低倍率の施設だったが、それでも二、三年の順番待ちだ。

「茨城なんか近いんだし、余裕ができたらまた戻ってくるよ」

「じいちゃんのことは気にせずに、頑張れ」

健斗は不意をつかれた。てっきり、目前の寂しさからくる言葉を口にすると思った。⑥カラ元気なのか、それとも言葉のとおり、祖父の進退を「気にせずに」生きてゆけと思っているのか。

「当面の間は茨城に赴任だけど、東京の本社なりに戻ってくる可能性はあるから」

その時、祖父もまだ特養の順番待ちをしながら生きているかもしれない。むしろ、死んでいる場合を、想像できなかった。特養に入れば介護のプロたちによる完全なる管理下で、祖父は X だろう。

「お母さんがガミガミ怒るだろうから、じいちゃんの味方するためにも盆、暮れ、正月には必ず帰るから。俺がやって来るのを待っててよ」

「電車ですぐなんだし、週末暇だったらいつでも来なさいよ」

「いや、健斗には健斗の時間のあるけん、来んでよかよ。じいちゃん、自分のことは自分でやる」

駅ロータリーにつき、車のそばで重い荷物をすべて背負い立った健斗は、運転席の母と後部座席の祖父へ顔を見せるよう少し屈む^{かが}。

「じゃあ、行って参ります」

「はい、氣をつけて」

パワーライドドアが閉まりきる前に車は動きだし、サイドウィンドウやリアウィンドウ越しに、ⁱⁱⁱ祖父と健斗の手の振りあい^{は互い}の顔が見えなくなるまで続いた。

京王相模原線の新宿行きに乗った健斗は、最後尾車両の運転室前の角に重い荷物を置き、窓の外を眺める。反対側には小山の斜面や緑しか見えないが、健斗のしている側には開けた視界に古びたマンションや一軒家、それに空の遠くに巨大な白い積乱雲が見える。澄みきった青空の中で、^{iv}近づいてきているのか遠のいているのかもわからないそのシルエツトは、異様な存在感を呈していた。

約一年ぶりのサラリーマン生活を、健斗は不安に思っている。粉飾決算をした会社の子会社の離職率は高いらしかった。それに、三〇年近くずっと東京の南西で育った身には、知人が一人もない新天地でうまくやっていけるのかもわからない。斜め向かいの席では、一目で素材の良さのわかる麻ジャケットを着た男と立体裁断のワンピースを着た女の健斗と同年輩カップルが、静かに談笑している。高

価そうな服を着た、顔形の整ったカップルはいかにも高収入のヤングエグゼクティブふうで、なにより、自信に満ち溢れた感じが曇りのない笑顔に表れていた。自分との差に健斗が目を逸らした先にも、シートに並んで座る同年輩夫婦に男児一人の三人家族が映る。ビール腹が板についた夫はどっしりしており、とうに諦めを知り、それと引き替えに人のために生きることを悟っている雰囲気をもしている。彼ら彼女らと比べ自分は、三〇前にしてようやく再就職できただけの、ひどく不安定な存在だと健斗は感じた。支えを失い、よろめいてつまずき転んでしまいそうな心地だった。ふと、優先席の老人に目が向いていて、祖父を探していたことに健斗は気づく。⑤自分より弱い肉体が、そばにない。

やがて電車は多摩川へさしかかり、座っていた乗客の何人かが立ち上がり、健斗のように窓の外へ目を向けた。広い川幅に水流が分散しているためか川面の所々に、砂利の中州が見える。そして川のはるか上空に、虫でも鳥でもないなにかが飛んでいた。プロペラ機だ。近くの調布飛行場から出たセスナだろう。戦後の管理者が在日米軍から日本政府、東京都へと変遷する中で調布飛行場はその存在意義を薄れさせ、個人所有のセスナばかりが離着陸する道楽用みたいな空港になった。しかし電車の中からたまにセスナを目で追いかけるぶんには楽しめ、それは健斗がまだ一人で電車に乗ることもできなかった小さな頃から今に至るまで変わらない。

積乱雲は、近づいてきていた。数時間後の夕方までには多摩グラントハイツの上空を覆い、暗い部屋で⑥気の塞いだ祖父が死にたいとつぶやきだすだろう。自分がいなくなった家で、母がそれに耐えられるかどうかも健斗は心配する。

あらゆることが不安だ。

しかし少なくとも今の自分には、昼も夜もない白い地獄の中で闘い続ける力が備わっている。先人が、それを教えてくれた。どちらにふりきることもできない辛い状況の中でも、闘い続けるしかないのだ。

プロペラが視認できるほどにまで近づいてきていた、セスナは、いつのまにか雲に隠れ、見えなくなっていた。

(羽田圭介^{はだけいすけ}『スクラップ・アンド・ビルド』より。出題の都合上、本文中に一部省略した箇所がある)

(注) 究極の尊厳死をかなえてやろうとする親切心とも異なる熱——「早う死にたか」という祖父の言葉をいつも聞いている健斗が、祖父の願いをかなえることについて考えていることを指す。

問1 傍線部②の本文中における意味として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

② 小休止し

- ア ほんの少しの間休んで
- イ のびのびと羽を伸ばして
- ウ 自分の役割から離脱して
- エ ゆっくり休憩して
- オ 時間をつぶして

問2 傍線部⑥の本文中における意味として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

⑥ カラ元気

- ア 本音とは裏腹な態度をとること
- イ 元気だと思いついでいること
- ウ 平気なふりをしていること
- エ 健康そうに見せかけること
- オ やたら明るくふるまうこと

問3 傍線部⑦の本文中における意味として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

⑦ 気の塞いだ

- ア 生きる気力がなくなった
- イ 悲しみに打ちひしがれた
- ウ 恨みがましい様子の
- エ 心が晴れやかでない
- オ 不機嫌な様子の

問4 傍線部①「お母さんって呼ぶな」とあるが、母はなぜこのような言い方をしたのだと考えられるか。その説明として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

ア 何かにつけて子どものように尋ねてくる父親にいらだたしさを覚えつつ、あえて突き放すことで自分が父親であることを思い出してほしいと考えたから。

イ 高齢の父親から「お母さん」と呼ばれて母親としての役目を求められることに強い嫌悪感があり、父親の存在を拒絶したい気持ちがあるから。

ウ 親子関係がすっかりわからなくなってしまう、自分の娘のことを母親と勘違いしている父親の間違いをただすために強い口調で印象付けなければと思ったから。

エ 入浴の補助は体力が必要であるという理由から健斗の役目であると決まっているのに、その取り決めに無視して自分に頼んでくることが腹立たしかったから。

オ 薬は飲むのか、風呂に入ったほうがいいのかなど、当たり前の事柄についていちいちお伺いを立てる父親の神経質さにいらだっていたから。

問5 傍線部②「自分自身の精神も丸腰にされるようで異様に疲れる」とあるが、なぜか。その説明として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

- ア 裸の祖父は普段接する祖父とは違う見知らぬ老人のようで、他人に対面しているような居心地の悪さを感じているため。
- イ 浴槽への出入りを手伝うのは細心の配慮が必要で、入浴を見守るだけだったこれまでとは勝手が違い緊張しているため。
- ウ 慣れない入浴介助に加えて、裸の祖父の皮膚に触れるのにも抵抗があるが、その気持ちを見透かされまいとするため。
- エ 裸の祖父を介助することで、自分も隠し事なく正直に祖父と向き合わなければならぬという気持ちにさせられるため。
- オ 裸の祖父に触れることに不慣れで、普段通りの祖父への接し方が通用しなくなり、戸惑いと緊張を強いられるため。

問6 傍線部③「おぼれた。本当におぼれた。」とあるが、このときの健斗の心情の説明として適当でないものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

- ア おぼれている祖父の姿を目の当たりにし、祖父の死が現実のこととして迫ってきたことでうろたえている。
- イ お風呂でおぼれるというのは祖父の杞憂きゆうだと一方的に決めつけて、目を離してしまったことをまづかったと感じている。
- ウ とっさに健斗自身が子どもの頃に祖父から叱られた記憶が頭をよぎり、祖父に叱られることを予感している。
- エ 無言の祖父から激しい怒りを感じ、わざとおぼれさせようとしたのではないかと疑われていることを察して憤慨している。
- オ 心の奥に究極の尊厳死をかなえてやろうという思いがあったせいで、入浴時の危険を軽視していたのではないかと呆然ぼうぜんとしている。

問7 傍線部④「その一言に、一畳半ほどの脱衣所で平衡感覚を失い、おぼれそうになった。」とあるが、このときの健斗の様子の説明として
適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

- ア 自分の不注意で祖父を死なせるところだったのに、「健斗が助けてくれた」と感謝する祖父の優しさに触れて動揺している。
- イ 感謝の言葉を口にしながらも、「死ぬとこだった」と嫌味をいう祖父が、本心では怒っているとわかり愕然がくぜんとしている。
- ウ 死にたがっていると思っていた祖父が、本心では生きてがっていると思え、自身の浅はかな思い込みに衝撃を受けている。
- エ 究極の尊厳死をかなえてやろうとする健斗の気持ちが親切心からではないことを祖父に気づかれたと感じ、恐怖心を抱いている。
- オ 「死ぬとこだった」という祖父の切実な言葉を耳にして、自分が甘い気持ちで介助していたことを心から後悔している。

問8 空欄 X に入る表現として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

- ア 安心して手厚い介護をうけることができる
- イ 温かく見守られながら尊厳死を迎えることができる
- ウ これまでのように早く死にたいとは言わなくなる
- エ やがて孫の顔も忘れてしまうことになる
- オ 苦しみながらもつと長生きさせられる地獄を味わう

問9 傍線部⑤「自分より弱い肉体が、そばにない。」とあるが、このときの健斗の心情の説明として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

ア 優先席に目をやって、今しがた別れたばかりの祖父の姿をそこに探していたことに気づき、自分という介助の手を失った祖父の心中を思いやっている。

イ 家の中では体が弱っている祖父を支える存在だった自分が、世間では取るに足りない存在に過ぎないことを感じて、自分の存在意義を見失いかけている。

ウ 一年間自宅で祖父とともに過ごしている間に、祖父との間に強いきずが生まれていたことを改めて実感し、祖父との別れを痛切に悲しんでいる。

エ 自信に満ち溢れたカップルや落ち着いた雰囲気の同年輩夫婦と比べて、三〇前にしてようやく再就職できた自分は社会の落ちこぼれに等しいと感じている。

オ 約一年ぶりのサラリーマン生活を前にして緊張のあまり周囲の乗客に引け目を感じているが、祖父のことを思い出し祖父を心の支えに頑張ろうと思っている。

問 10 本文の表現についての説明として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

ア 波線部 i 「母は玄関まででいいだろうと文句を言いつつも、結局は車をとりに行った」は、もう二度と会えないかもしれないためどうしても孫を見送りたいという祖父の気持ちに寄り添っていることを表している。

イ 波線部 ii 「じいちゃんのことには気にせんで、頑張れ」は、健斗と離れることの寂しさはあるものの今後の不安は払拭されたことを伝えようとする祖父の孫に対する励ましの言葉である。

ウ 波線部 iii 「祖父と健斗の手の振りあいには互いの顔が見えなくなるまで続いた」は、風呂で祖父がおぼれかけたことで険悪な雰囲気になりつつも、互いの今後を案じる気持ちが込められた表現である。

エ 波線部 iv 「近づいてきているのか遠のいているのかもわからないそのシルエットは、異様な存在感を呈していた」は、雷雨をもたらす積乱雲により、今後の不幸な展開を暗示している。

オ 波線部 v 「セスナは、いつのまにか雲に隠れ、見えなくなっていた」は、祖父や母の今後への心配や自分の新しい職場への不安の中でも、そのとき持てる自分の力で立ち向かうしかないと気持ちを切り替える健斗の心情を表している。

第二問 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。なお本文上には設問の都合で段落番号 ①～⑬ を付してある。

① 遠隔対話システムの代表例であるビデオチャットは、コロナ禍以前から使われてきたが、時間や距離の制約のため対面での対話が難しい場合の代替手段と見なされることが多かった。理由の一つは、伝送される映像や音声の品質、通信遅延の問題など、通信に伴う情報劣化にある。しかしそれ以上に、人が対面で得ている^(注1)ノンバーバルな情報が伝達されにくいということが、対話の質に大きく影響することがわかっている。視線やちよつとした仕草の持つ情報、行為の同調などリアルタイムだからこそ生じる意味が伝わらないだけで対話は難しくなる。また、眼前に人が存在する場合と比べてモニタの中に表示される人は存在感が薄く、対面と遠隔が^②「ヘイヨウさ」れる会議では遠隔参加者の影響力が弱まってしまう。

② コロナ禍以降、ビデオチャットが積極的に利用されることが当たり前になった現在、上記問題の一部はあまり意識する必要がなくなってきたものの、依然として対面対話のようにはいかない場面が多い。たとえば遠隔講義では、授業に対する学生の反応がわからないため、進度の適切さを判断することが難しい。この問題は、リアルタイム質問収集システムなど、ビデオチャット以外のコミュニケーションチャネルをヘイヨウすることである程度解決できる。実際にこうした新たなチャネルを導入した遠隔授業の学生からの評価は高く、「積極的に授業に参加できるようになった」等の意見が多く聞こえてくる。もちろんこの工夫だけでは十分とはいえないが、ビデオチャットという代替手段に加えて新たなチャネルを用意することで、対面を超えた効果を持つ講義が可能になったという点には大きな可能性が見いだせる。

③ さらに、^③ビデオチャットそのものを、現実を超えた対話を実現するメディアとして捉え直すこともできるだろう。最近ではバーチャルにメイクをした顔で遠隔会議に参加できるシステムなども開発されているように、ビデオチャットではやりとりされる情報を加

工することができる。こうした情報の加工は、表情や音声のニュアンスから感情や意図を読み取る人の認知機能に働きかけ、遠隔対話で伝わりにくい感情や意図を誇張して伝達したり、伝える必要のない情報をサク^⑥シヨ^⑦して本来の感情や意図が伝わりやすくしたりすることに利用できる。ビデオチャットにおいて、対話相手の表情を加工して笑顔に見せると^(注2)ブレインストーミングで出るアイデアの量が1・5倍になることや、相手の表情と同調して表情が変化するように見せると共感が高まり遠隔対話が円滑になることが確かめられるなど、対面を超えるコミュニケーションを実現する研究も登場している。

4 これまでの遠隔対話は、遠隔の状況をできるだけありのままに正確に伝えることが重要視されてきた。この考え方は、対面に軸足を置き、対面と足並みを揃^{そろ}えた遠隔対話を実現しようというコンセプトに基づいている。一方で、コロナ禍以降の社会では、もはや対面しないことの価値が見いだされつつある。対面コミュニケーションの特性から一度離れ、遠隔でしかできないことは何かという観点からスタートして考えるとき、対面対話を超える遠隔コミュニケーションの可能性が開かれる。今後は現実を超えるコミュニケーションを実現する研究の重要性が増すとともに、コミュニケーションの意味を再考して社会システムを見直していくことも必要になるだろう。

5 対面コミュニケーションがビデオチャットに置き換えられるなかで、やはりビデオチャットでは不十分であるという面も明らかになってきている。たとえば、コミュニケーションにおけるソーシャルタッチは、利他的な行動・判断の促進、ストレス低下や共感の誘発といった効果を生むことが知られているが、こうした身体に依拠した人間のコミュニケーション様式を現状の遠隔コミュニケーションシステムでジュー^⑧ゼン^⑨に使えるようにすることは難しい。こうした問題は遠隔コミュニケーションにおける身体性の欠落の問題として捉えることができるだろう。ポストコロナに向けて、今こそ、これまでは当たり前のものでして意識されることが少なかった身体性について再考し、^⑩遠隔コミュニケーションに身体性を取り入れていくことで、我々の知を従前以上に発揮できるようにすることが求められる。

6 遠隔コミュニケーションに身体性を取り入れる動きの一つが、^(注3) テレプレゼンス、^(注4) テレイングスタンスにおけるロボットアバタ（代理身体）の活用である。遠隔地にロボットを送り込み、それに憑依したかの^{ひょうい}ように操作し、周囲の人や環境との物理的な相互作用を可能にするしくみは、いまや実用化の域にある。

7 他方、遠隔コミュニケーションに身体性を求める人々はオンラインのソーシャルVRサービスに集まり始めている。VR環境では、アバタを自身の身体の代替として用いたコミュニケーションがおこなわれる。ここでのアバタは、自分にそっくりなものだけでなく、ロボットやアニメ調のものなど、その見た目をユーザが自由に設定できる。さらには、異性のアバタ、超人的なジャンプ能力など現実ではありえない特殊能力を持つアバタ、しつぽなど人間にはない部位のあるアバタ、動物のアバタ等、現実とは異なる身体経験を与えるアバタも利用可能である。この20年間のVR研究は、そのような実際の身体とは大きく異なる特性を持つアバタであっても、自らの身体動作と連動させて動くようにすることで、それを自分の本当の身体のように感じさせられることを明らかにしてきた。このとき、アバタは現実の身体と同様の効果を生み、遠隔コミュニケーションにおいて身体性を活用するための鍵となる。

8 さらに、自らの身体と異なる特性のアバタを操る際には、X ことが明らかになってきている。そうした効果の代表的な例として、身体の見た目の変化がコミュニケーション様式を変化させる^(注5) プロテウス効果があり、魅力的な容姿のアバタや身長の高いアバタを用いるとコミュニケーションに積極的になる等の行動変容が起こることが示されている。また、白人が黒人のアバタを操る経験を経ると潜在的な人種差別的偏見が軽減することや、スーパーマンになって他者を能動的に助ける体験を経るとVR体験後も利他的な行動を取るようになること等、アバタを通じて得られる身体経験が我々の思考や行動に影響を与えることも確かめられてきた。

9 アバタがもたらす身体性の変容とその効果についての科学的理解が進んだことで、その工学的活用も取り組まれ始めている。たとえば、家庭内暴力の加害者が被害者視点の体験をすることで被害者の感情を読み取る能力が正常に近づくことが確認されており、そう

した効果を家庭内暴力の低減プログラムに活用する活動などが行われている。上述した、自身や対話相手の表情を変化させて創造性を高める技術も、身体性変容が生む知性の拡張を工学的に活用する一例といえよう。また、新技術によって初めて可能になる^④「身体のあり方」を活用する方法論についても模索が始められている。たとえば、飛行能力をイメージさせるドラゴンアバタに没入した状態で飛行ドローン进行操作させることで空間把握と操作能力を向上させることができるといった事例のように、元来人が有しない能力すら人が獲得できるように身体性変容を活用することも検討されている。

10 持つて生まれた身体性からの脱却を可能にし、新たな身体性を与える技術、そしてその効果を積極的に用いる技術の研究開発は、遠隔コミュニケーションの支援のみならず、幅広い分野で人の身体的能力、認知能力および知覚能力を向上させることに利用でき、社会に大きな変革をもたらす可能性が高い。

11 製造業や建設業はテレワークが困難な職種であるが、できるだけ現場作業員を減らす工夫が求められている。これに対して、遠隔地から熟練者がビデオコミュニケーションシステムを利用して指示を出すなどすれば、現場にいる人員を削減できることが期待される。

12 これらは主に二つの方式に分けられる。一つは拡張現実のゴーグルとカメラを組み合わせたシステムを現場の作業者が装着し、その映像を見ながら遠隔の指示者が画面共有機能や拡張現実技術を利用して指示を出すという方法である。もう一つは、テレプレゼンスロボットと呼ばれる、遠隔操作型のロボットをコミュニケーションメディアとして利用して、遠隔熟練者からの指示を伝えるという方法である。ロボットの腕、ロボットに搭載したプロジェクタやレーザーポインタなどによって、遠隔地から現場の「もの」に対して直接ポインタリングできるようにする例がある。

13 今まではこうした現場とのコミュニケーションを支援するシステムの導入は進んでいなかったが、ビデオコミュニケーションが一般的になり、5Gのような高速無線通信環境が整備される近未来では、⑤「そうした技術を実用化するための研究が加速する可能性がある。

このとき注意すべきなのは、単に機器の性能を向上させるのではなく、人と人のコミュニケーションの特性を理解した上で、機器開発をしなければならぬということである。そうした特性の一つに、視線やその他の予備動作などの社会的手がかり (social cue) がある。これは対話者の行為を预期するための重要な資源であり、これによって対話が円滑になるのである。しかしテクノロジーを媒介したコミュニケーションにおいては、社会的手がかりが伝わらないために、コミュニケーションが非効率的になることが知られている。したがって、これからの遠隔指示システムは、社会的手がかりを検出し、適切に遠隔対話者に伝わるように加工し、提示する必要がある。遠隔コミュニケーションシステムは、その設計段階から social cue の支援を考慮する、social cues by design でなければならない。

(東京大学情報理工学系研究科編「サイバー空間と実世界を結ぶ」

『オンライン・ファースト コロナ禍で進展した情報社会を元に戻さないために』より。)

(注1) ノンバーバルな情報——非言語情報。

(注2) ブレインストーミング——複数人でアイデアを出し合うことで発想を促す会議手法。

(注3) テレプレゼンス——現場にいるような臨場感を提供する技術の総称。

(注4) テレイグジスタンス——遠隔地にあるロボットをアバターとして利用し、自分がその場所にいるような体験を可能にする技術。

(注5) プロテウス——自由自在に姿を変える力と予言の力を持つギリシア神話の海の神。

問 11 傍線部①に相当する漢字を含むものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

①
ヘイヨウ

- ア 胸像がヘイリツしている。
- イ ヘイソクカンに満ちた時代。
- ウ 多くのヘイガイを伴う規則。
- エ 図書館にヘイセツされた施設。
- オ オウヘイな態度をとられる。

問 12 傍線部⑥に相当する漢字を含むものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

⑥ サクシヨ

- ア 年功シヨレツの因習。
イ 遠くからシヨヤの鐘が聞こえる。
ウ シヨサイなく振る舞う。
エ 通学路ではシヨコウ運転を心がける。
オ 自らの体験をありのままにシヨジュツする。

問 13 傍線部⑦に相当する漢字を含むものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

⑦ ジュウゼン

- ア 問題解決にバンゼンを尽くす。
イ 状況はゼンジ好転しつつある。
ウ ゼンエイ芸術の旗手となる。
エ 屋根のシュウゼン費用を見積もる。
オ 不正にカンゼンと立ち向かう。

問 14 傍線部①「遠隔対話システムの代表例であるビデオチャットは、コロナ禍以前から使われてきた」とあるが、「ビデオチャット」の最

も大きな問題はどのようなことか。その説明として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

- ア 通信機器や通信手段の不具合により、円滑な意思疎通が阻害されることがあるという問題。
- イ 映像や音声の伝達技術が未熟で、対面時と比較して会話の即時性が損なわれるという問題。
- ウ 参加者全員がビデオチャットのツールの使い方に慣れるまで一定の時間がかかるという問題。
- エ 対面での会話で得られるような互いの表情や仕草による情報が伝わりにくいという問題。
- オ 対面参加者と遠隔参加者が混在している場合、遠隔参加者の心理的負担が大きいという問題。

問 15 傍線部②「ビデオチャットそのものを、現実を超えた対話を実現するメディアとして捉え直すこともできる」とあるが、「現実を超えた対話」が実現した例の説明として適当でないものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

- ア 遠隔授業の際にリアルタイム質問収集システムを使用して学生の反応を把握し、適切な進度を維持する。
- イ 画像加工システムを使って自動でメイクを施し、実際にはメイクをしていない状態のまま会議に参加できる。
- ウ 参加者の表情や音声の情報を加工することで、対面で会話するときよりも相手の感情や意図をくみ取りやすくする。
- エ 画像処理によって他者の表情を模倣するミラーリングを擬似的に発生させることで、相手に好印象を与える。
- オ 会議参加者の表情を笑顔に加工することで、褒める効果によってブレインストーミングでの創造性を高める。

問 16 傍線部③「遠隔コミュニケーションに身体性を取り入れていく」とあるが、筆者がこのことに目を向ける理由の説明として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

ア 現状の遠隔コミュニケーションにおいては、対面コミュニケーションにできるだけ近づけるためにやりとりされる情報を加工することしかできないから。

イ 対面コミュニケーションで大きな効果を生む身体接触が遠隔コミュニケーションでは行えないため、遠隔地の人との物理的な相互作用を実現する必要があるから。

ウ コミュニケーションのあり方が対面重視から遠隔重視へと変化した現在、遠隔コミュニケーションにおける身体性の欠落という問題が看過できなくなったから。

エ VR環境では、アバタを自身の身体として用いることで実際の身体にない特性や身体経験を持つことができ、持つて生まれた身体を凌駕する存在になり得るから。

オ 対面コミュニケーションでは当たり前のものである身体性を遠隔コミュニケーションに取り入れることで、新たなコミュニケーションの可能性が広がるから。

問 17 空欄 X に入る表現として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

- ア 自分自身とは正反対の属性を持つアバタを選択しがちである
- イ 潜在的な欲求が自分の分身であるアバタに投影されやすい
- ウ アバタが持つ特徴に引きずられて操作者自身に変化が現れる
- エ 人種差別的偏見の解消や利他的な行動の契機となり得る
- オ テクノロジーの進歩によりアバタと完全に一体化できる

問 18 傍線部④「身体のあり方」とあるが、新技術による身体のあり方の活用は、何をもたらすのか。その説明として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

- ア 遠隔コミュニケーションが困難な領域においても、対面コミュニケーションと同等の成果を得ること。
- イ 身体の物理的限界を超えたり別の身体の視点で行動したりすることで、現実には得られない興奮を得ること。
- ウ 自身や相手の見た目によってコミュニケーションが活性化されることを活用して、知性の向上を図ること。
- エ 新たな身体性が与えられることによって、身体に根差した認知能力や知覚能力を拡張させること。
- オ ロボットアバタと現実の身体とを一体化させることで、人間の身体が持つ以上の能力を獲得すること。

問 19 傍線部⑤「そうした技術を実用化するための研究」とあるが、遠隔コミュニケーションを支援する技術開発における課題の説明として、
適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

ア 遠隔コミュニケーションが不可避となっている現在においては、テレワークが困難な職種においてもビデオコミュニケーションシステムを構築して現場作業を行う人員を削減する必要がある。

イ 現場の作業者が装着したカメラの映像を見ながら指示を出す場合、遠隔で指示を行う者が微細な手がかりを見落とさないよう、双方のコミュニケーションを円滑に行う必要がある。

ウ テレプレゼンスロボットと呼ばれる遠隔操作型のロボットを用いて作業する場合、熟練技術者の高度な技能を伝達するためには、より高度な通信環境を整備する必要がある。

エ 建設業など危険を伴う作業を行う遠隔コミュニケーションでは、遠隔で指示を行う者が現場の人間と同等のレベルで視覚、聴覚などの感覚刺激を受容できるシステムの開発が必要である。

オ 現場とのコミュニケーションでは、動作、視線なども相手の意図を読み取るための重要な情報であるため、直接的な会話以外の要素を検知してコミュニケーションを効率化する機器開発が必要である。

問 20 本文を四つの意味段落に分けたとき、その分け方として適当なものを、ア～オの中から選んで答えなさい。

オ	エ	ウ	イ	ア
1	1	1	1	1
・	∪	∪	∪	∪
2	4	∪	4	3
∪	∪	2	∪	∪
3	5	∪	5	4
∪	∪	5	・	∪
6	8	∪	6	6
∪	∪	6	∪	∪
7	9	・	7	7
∪	∪	7	∪	∪
11	12	∪	10	9
∪	∪	8	∪	∪
12	13	∪	∪	∪
・		13	11	10
13			∪	∪
			13	13

第三問 次の設問に答えなさい。

問 21 次の文に含まれる意味を表現している四字熟語を、ア～オの中から選んで答えなさい。

行政からのウイルス感染拡大防止のための外出自粛の要請と、経済の行き詰まりを打開するための、観光業による地域経済の活性化の動きとは、どちらにも合理的な根拠があり、同等に妥当性が主張されてきた。

- ア 二律背反
- イ 相互矛盾
- ウ 有備無患
- エ 一触即発
- オ 二項対立

問22 次の故事成語の正しい意味はどれか、ア～オの中から選んで答えなさい。

臍^{ほぞ}を嚙^かむ

ア 若いうちにつらく、苦しいことを経験することのたとえ。

イ すでにどうしようもなくなったことを悔やむことのたとえ。

ウ 大きな目的を果たすために、苦労を重ねることのたとえ。

エ 弱者でも強者の弱点を狙えば逆襲することができることのたとえ。

オ 強く覚悟を決めて、実現困難と思われることに挑戦することのたとえ。

問 23 次の文の傍線部の語句の正しい意味はどれか、ア～オの中から選んで答えなさい。

人は自分にとって都合のいいことだけを信じようとする傾向があるため、フェイクニュースに振り回されることがある。

ア 意図的に特定の立場の意見のみで構成されたニュース。

イ 情報の発信元が明らかにされていないニュース。

ウ だますことを目的として、意図的に虚偽の情報が含まれたニュース。

エ 不確実な根拠に基づいて発信されたニュース。

オ 発信元の調査不足により、結果として誤報となったニュース。

問 24 次の文の傍線部の語句の正しい意味はどれか、ア～オの中から選んで答えなさい。

日常のあらゆる場面で、身体が発している信号が、メタコミュニケーションとして機能している。

- ア 口になっている言葉と真意とが異なることを伝えるための行動。
- イ 周囲にいる人間の注意や関心を喚起するための身体による合図。
- ウ コミュニケーションを円滑化するための言語によらない意思表示。
- エ 相手に対して、自分の望む行動を促す意図を含んだ発語。
- オ 会話と無関係の情報を与えてコミュニケーションを阻害する要因。

問25 次の文の空欄に当てはまる語を、ア～オの中から選んで答えなさい。

もともとはアメリカの企業が、社会的マイノリティーである人々の就業機会を拡大するために、年齢、性別、国籍にこだわらず様々な人材を登用するという考え方である。日本でも、この を生かした企業マネジメントに取り組む企業は増加している。

ア グローバリゼーション

イ フェミニズム

ウ LGBT

エ ダイバーシティ

オ イノベーション